

た。バーチャルリアリティをトピックとする学会ならではの抄録集になったと我々出版委員も自負している。

今大会で大会論文集をCD-ROM 論文集と抄録集にしたことにより、発表者や参加者の方々にご迷惑をおかけしたことも少なく無い。次回以降、同様の問題が発生しないよう、再度検討した上、次期委員への申し送りとさせていただきたいと思う。

なお、表紙の曼荼羅はVRを中心とし、関連の強い技術と思われるものを周りに配置した。さらにその周りにも要素技術が取り囲んでいるのだが、これらには皆さんのVR研究に関するキーワードを入れていただき、各々のVR曼荼羅を今後完成させていただきたい。



第9回大会論文集抄録集

◆会計担当より

黒田知宏

会計担当（京都大学）

前回大会の直前、幹事である横小路先生からの「黒田先生、次回大会の会計お願いしますね」という突然のお言葉で私の第9回大会は始まった。「ま、第8回大会の決算を踏襲すればよいだろう」という私の甘い読みは、第8回大会が岐阜県からの支援の下で開催されたという事実によって最初から木々端みじんに打ち砕かれ、支援分を除くと予算的には余裕がないことが分かった。幸い実

行委員全員が「懇親会は派手に、他は緊縮財政で」ということで一致し、会場を当初予定していたばるるプラザから京都大学に移し、予稿集をCD-ROM化するなど、支出の大幅なシェイプアップをすると同時に、参加者の皆様には申し訳なかったが、参加費を若干上乘せさせて頂くことで、どうにか予算の形を作ることが出来た。ふたを開けてみれば、実行委員の先生方の努力で多くの企業展示が集まり、また過去最多の参加者数を数え、予想よりも若干黒字で大会を終了出来そうではっきりしている。振り返ってみれば、総務の角所先生が会期中に「今回の実行委員会には誰も慎重な人がいないから、ブレーキが全くかからずに何でもやっちゃいましたね」とおっしゃっていたように、「いけいけどんどん」な先生方が集まっていたお陰で、全く予想がつかない試みが平気で実現され、私のいい加減な予算読みによって、会計的には何度もどきどきしたにもかかわらず、時には無料で企画を実現して頂くことで、結局大きな事故無く財布を閉じることが出来そうである。次回実行委員に引き継ぐことが出来れば、「みんな優秀な先生方だから、方針さえ示せば何とかして頂けますよ」の一言に尽きるだろう。私の無理な注文を実現して頂いた実行委員の先生方と、面倒くさがるの私の代わりに詳細な会計管理をして下さった京大病院医療情報部の塩見香保里女史に心から感謝したい。

◆総務担当より - 大会総務とVR技術? -

角所 考

総務担当（京都大学）

VR学会の大会を開催するための主な仕事には、会場準備やプログラム編成、展示、出版、広報、懇親会、ツアー、会計...等々がある。これらを縦糸と見た場合、総務の仕事は横糸に相当し、各担当実行委員による縦糸の仕事を取りまとめ、全体的な連携を保つのが主な役目と言える。今回この役目を担当して痛感したのは、メールによるコミュニケーションの不便さであった。実行委員会の頻度は、委員のスケジュール的に2箇月に1回程度が限界であり、それ以外はメールで情報交換せざるを得ない。ところが、そのようなメールは長文になりがちで、どの委員に送るべきか即断しにくいものはいきおい委員全体のメーリングリストに送られるため、長文のメールが頻

繁に飛び交ってフォローが難しくなり、結果として各委員の作業の分散独立化(?)が進んでしまったように思う。そのような状況では、各委員が自分の仕事としてどこまでの範囲を視野に入れているのか、その仕事を進める上で他のどの委員と連携がとれているのかといったことを把握するのが難しく、総務担当としては、大会が始まってから初めて作業の見落としに気付いて慌てるようなことが起きたりしないか、最後まで不安であった。

その一方、大会開催中は、実行委員間の迅速で活発なチームワークが会場内の随所で練り広げられ、数々の問題が鮮やかにクリアされていくのを体験して、メールと対面による共同作業のレベルの違いを改めて強烈に再認識させられた。考えてみると、VR技術の目標は、このような現実の世界と電子的な世界のギャップを埋めることであり、VRを冠する本学会の大会準備作業がその恩恵に浴する日が早く来ないものかと、大会を終えてみて総務担当実行委員の立場から回想している次第である。

最後に、私が横系の仕事以外に担当した縦系の仕事として、無線LANやCD-ROM論文集の印刷サービス等がある。無線LANについては、本学の岡部寿男教授のご協力により、時計台記念館の会場内に“みあこネット”のサービスを提供して頂いたが、物理系校舎の会場については、建物内の情報コンセントの利用ポリシー上の問題で設置が間に合わなかった。また印刷サービスについては、生協との事前打合せ不足もあり、一部印刷できない論文があった。さらに、これら以外にも参加者各位にご迷惑をお掛けした点多々あったかと思う。この場をお借りして不手際をお詫び申し上げる次第である。

◆座長からの報告

1A1：ユーザインタフェース1

座長：岸野文郎（大阪大学）

初日の最初のセッションであり、前日からの台風の影響が心配されたが、登録受付は賑わっており、一見、影響がないか見えた。

バーチャルリアリティシステムをより使いやすくするためには、操作対象に働きかけるインタフェースが重要となり、本セッションでは広くVRに適用する各種インタフェースに関する検討結果が紹介された。

最初の発表は3次元入力デバイスとして、加速度セ

ンサと角度センサを用いた把持式の非拘束型の提案であり、精度等の観点から使用範囲は限定されようが面白い試みである。続いてやはり加速度センサを用いたジェスチャー入力による装着型の画面操作作用インタフェースの提案と試作が紹介された。3件目はタッチパネル用透明触覚スイッチに関する発表であり、VRには直接は関係ないものの、タッチパネル上で触覚を実現した興味ある発表であった。4件目は網膜チップカメラとCCDカメラを用いた指差しの認識であり、聞くのを楽しみにしていたが、前日の台風の影響で発表者が間に合わず聞くことができず誠に残念であった。最後は全方位ディスプレイを用いた対面型協調作業のユーザインタフェースとしてGUIベースの複数のPDAを適用した提案であった。

1A2：計測・センシング

座長：下条 誠（電気通信大学）

本セッションは以下のような内容の講演が行われた。

①熱画像により人物を切り出す手法を応用した研究である。人物の背景もしくは人物をぼかすことによりプライバシー保護への利用を想定している。②位置計測の手法の提案である。部屋の壁等の実空間に、位置既知のLED等のランドマークを置き、計測対象に取り付けた魚眼レンズ等を用いた全視野カメラ画像から位置計測を行う提案である。③位置計測の手法として超音波を用いる方法の提案である。従来は超音波の伝搬時間を用いていたが、その情報に超音波の到来方向角度を計測することにより精度を向上させようとする試みである。④これは展示システムにおいてインタフェースの相違の比較検討を行った。システムとしては、レーキ走行車を使い、石庭を掃く動作により文様を作らせ、遠隔からの操作指示として熊手を利用する、ペンタブレットによる、発話による等を用いたものである。⑤全身運動をインタラクティブにコンピュータアニメーションとして生成する方法として、操作者の動作を重回帰分析による複数動作の認識を行わせる提案である。

テーマ範囲が広いと、聴衆の関心もそれぞれのテーマに分散していたようであった。

1A3：ユーザインタフェース2

座長：北村喜文（大阪大学）

当初5件の発表がある予定であったが、前日に北九州地方に上陸した台風18号の影響による飛行機の欠航の